

第四回星野立子新人賞

「手毬つく」 涼野 海音

光に眼をひらきたる子猫かな

父と子の間に回る扇風機

返事せぬ男の子がひとりあたたかし

帰省子のポメラニアンを連れてきし

ビー玉の空の色なる春休

水澄みていづれの山も遠からず

鳥籠に鳥の骸や春の夜

木犀の香り移れる背広かな

水温むベンチに手紙読んでをり

東京にあふ人のゐる秋の雨

散らかれる部屋の隅なるヒヤシンス

うそ寒や紙幣数ふる指の先

すれ違ひたる遠足のもう遠き

武蔵野の空のまぶしき案山子かな

坂の上の家灯りたる啄木忌

運動会額に風の立ちにけり

かげろふへ鶏は目を開けしまま

水色の原稿用紙小鳥くる

球場の跡に摘みたるクローバー

めとりたき人にどんぐり拾ひけり

居残りの子らに柳絮の飛びにけり

口ずさむ啄木の歌鳥渡る

マシヨンの灯りそめたる花疲

月の色して螿螂の枯れゆくか

桜葉降る夜のピアノ閉ぢにけり

小春日の草のほひの乳母車

鳶の輪の中の青空春惜しむ

だれもぬぬベッドあたたか冬の鴟

青芝の真ん中に立つ背広かな

日輪の下へ飛びゆく木の葉かな

蛇の衣天王山に吹かれをり

三冊子読みつつみかん剥いてをり

釣堀に一番星の映りたる

手のひらに川のにほひや日向ぼし

ひとすぢの道に玉虫死せるのみ

ネクタイを吊る凍星のあまたなり

父の日の拳に夕日とどまれる

冬帝の下を歩いてゐる子かな

蛇打ちし棒黒々とありにけり

良寛の風の一字や冬籠

山鳩の声遠くより昼寝覚

狐火の吸ひ込まれたる闇深し

箱庭の一粒の砂ひかりけり

煤払終へ大粒の星ばかり

毛虫焼く火に恋文を破り捨つ

いくたびも職変へし年逝きにけり

蛍狩回送電車過ぎゆけり

雨音のかすかに昼の雑煮かな

海峡に朝来つつあり夏みかん

手毬つく音のだんだんわが音に